

## 論文の内容の要旨

論文題目 「金嬉老事件」のエコーグラフィー——メディア、暴力、シティズンシップ——

氏 名 鄭 鎬碩

本論文は、金嬉老事件についての歴史社会学的考察である。1968年、寸又峽で起きた金嬉老事件（以下、「事件」）は、その波及力の大きさ及び社会史的重要性が認められつつも、本格的な検討がなされず、その戦後史における位置づけも不明のままである。なお、45年以上続いている多面的な相貌としての解釈、これまでの日韓関係及び在日朝鮮人関連議論に付きまどってきた一つの「亡霊の記号」としての社会的内実は、単なる「過去の真相」という従来の視点を乗り越えて解明される必要がる。

事件は、暴力、人質、マスメディア、在日朝鮮人の諸要素からなる複合性および事件後の新たな事態などの理由から、公判終了後においても様々な形で引用され続けてきた。ところが、朝鮮人差別の社会環境もしくは、金の本性や意図に事件発生の原因を求める傾向が強い既存の議論では、在日朝鮮人や金の主体性、事件が媒介される社会的なコミュニケーションの水準、1968年以來の意味変容が問われなかった。

そこで、本論文は、Jacques Derridaのエコーグラフィーという概念に依拠し、事件を捉えなおした。媒介に先立つ出来事の固定的本質ではなく、反響（エコー）のほうから出来事を捉えることにより、媒介を通じて生み出された反響においてはじめて出来事の内実が現れていく事後的な意味付けのプロセスに注目した。その際、エコーグラフィーにおけるメディア—暴力—シティズンシップの相互関連を分析の軸とし、テキストとしての事件が異なる文脈において解釈され、更なる媒介の実践及びアイデンティティの変容にかかわる専有の社会現象を追った。

本論文の課題は、事件がこれまで呼び起こした反響（問1）及び、事件が多くに関心を掻きたててきた背景（問2）の解明である。前者は、事件の波及の広がりとその効果を、後者は、事件のユニークな特異性を問うものとして、最終的に、多彩な専有の軌跡から浮かび上がる事件像の、戦後史及び日韓関係における意味を照射している。

本論文では、歴史社会学と脱構築の方法を用いた。事件が、固定的な因果関係に回収されず広く波及する様子を捉える上で分析の対象となるのは、事件に対する専有の実践である。なお、政治的無意識の問題を提起する Fredric Jameson の方法論を参考し、多様なテキストの解釈に徹底する歴史性についての考察を行った。

問題の所在と研究の視点及び方法を明らかにした序章に続き、第1章では、次章から乗り越えられるべき対象としてのクロノロジー及び、反響の歴史的な文脈としての前史を示した。金の個人史と事件の経緯を示し、1960年代後半の重層的なコンテクストを、(1)在日朝鮮人の状況と「二世」の浮上、(2)ポストコロニアルな問題系の前景化と異議申し立ての噴出における直接行

動と暴力、(3)テレビを中心とする視覚イメージの流通と自己表出をめぐる再帰的感覚の浮上の各点からまとめ、分析の土台とした。

第2章では、マスメディアの位相を検討した。劇場型犯罪の客体（被害者）、もしくは事実捏造・歪曲の主体と、二つに引き裂かれた既存のメディア像に対し、論文は、メディアの介在による事件の内的構成に注目し、金の巧みなメディア・コントロールもしくはジャーナリストの倫理に回収されないメディアの位相を明らかにした。(1)当時のニュース・ネットワークの全国的系列化及びカラー映像の影響力を背景とし、社会問題化の強力な手段としてのメディアの構造的潜在力が事件の発生を条件づけ、(2)旅館内のテレビによる警察と金の仲介、報道内容をめぐる金と記者の複合的な牽制／共謀／協力関係のなか、メディアの介在そのものが出来事を成していた。(3)なお、新しい番組形式として既存のニュースとは異なる報道手法が実験されていたワイドショーは、金の電話を全国に流し、金の姿を繰り返し映し、また多くの映像資料を駆使して現場の状況を時々刻々伝えることで、金の存在感と事件の波及力を大幅に増幅させた。

第3章では、報道によって触発された反響を概観した。(1)事件は、幅広い年齢層の人びとに対し、過去の体験、朝鮮人問題、国家権力への抵抗など、多様な刺激を与えたが、(2)在日朝鮮人は、金に共感を覚えつつも犯罪に対して両価的な感情を抱いた。(3)韓国では、「同胞の苦難」という理解が現れ、「チョウセンジン」という軽蔑的表現からは被差別の集団的記憶が喚起された。また在日朝鮮人の再認識や日韓関係の反省にまで議論が及んだ。(4)他方、日本では、電波の公共性及びテレビの脆弱性、新たな時代における反権力闘争の潜在力や「未来のテロル」が懸念され、(5)共同体の文化を防衛し、体制の安全性を取り戻す動きとして、戦後平和主義の批判及び、ライフル部隊の創立などの現象が現れた。(6)その一方で、事件は、1980年代以降、「日本史上初の劇場型犯罪」として系列化された。

第4章では、「事件＝恐怖」という報道フレーミング及び、「金の魅力」を分析した。(1)文化的構成物としての「恐怖」は、「平和静かな寸又峽／平和を威嚇する金の騒動」、「文明としての町／野蛮なライフル魔」などの言語的二項対立のもとで成立し、報道では、「危険であるだけでなく異常な狡猾さを備えた金＝朝鮮人」の植民地主義的ステレオタイプが再生産された。(2)金のイメージにおいては、命がけで自分の考えを主張する英雄的な姿が悲壮美・男性美と共に強調されたが、そこには、他者、あるいは法権力に抵抗する大犯罪者に対する恐怖と魅力の二重の感情、大衆文化における「否定の気持ち」の消費の現象が複合的に関わっていた。

第5章では、「民族問題」としての専有を検討した。事件に触発され、民族責任と朝鮮人の問題を公共的議題として提出した金嬉老公判対策委員会（以下、「委員会」）の言論活動は、運動主体のアイデンティティ（差別者と訴えられた側として公判に関わる意味）と運動の目標（無罪判決の可能性のない公判に関わる意味）をめぐる思想的格闘であった。委員会は、(1)「法廷」「弁護」の意味を、日本人の自己変革及び事件の歴史社会性への探求として専有し、弁護では、戦前から続く暴力を問いなおし、法条文の形式的適用による司法的同一性に差異を取り

込もうと試みた。(2)民族問題の言説は、自らの位置性への反省に基づいた「内なる第三世界」への自覚として、「反権力」「民衆」など潜在的な言説構築が試される中でその内容が多様化し、金に対する批判及び、一方的な告発以上の展望を深めながら展開された。(3)また、委員会の広報活動及び、他の市民運動との関係、運動参加者への影響に現れる「民族問題」の社会的位相から、事件の反響としての民族問題が、自分たちの過去と未来についての議論を重ねながら人びとが結ばれ、更なる波及を生み出す自律的な出来事であったことを明らかにした。

第6章では、事件の越境的反響を取り上げた。(1)日韓のマスメディアは、相手国の事件認識をほぼ同時的に伝えた。報道の相互参照が進むなか、委員会の活動は、韓国での救命運動を触発させ、韓国での活動は再び公判に影響を与えた。また韓国では、民主化闘争を背景とした長期囚の人権問題としての理解及び、冷戦的反共主義の影響も見られた。(2)1999年、金の韓国への送還は、財閥や大手新聞社の関与の下、メディア・イベント化したが、金の「英雄化」は、メディアが伝えた日本での評価や在日朝鮮人の立場、外国人の人権問題への反省などによって相対化された。(3)他方、金の再犯により、民族問題としての意味や「抗日」の大衆的英雄としてのイメージがくつがえされたものの、「親子物語」は語られつづけた。

第7章は、近年における専有の風景から、事件の現在的な意味を分析した。(1)金は、サブカルチャーにおける反権力のシンボル、韓国における政治パロディ、「懐かしい昭和」や寸又峡温泉地の広報などで専有される一方で、1990年代以降にも被差別や周辺化との関連で「民族問題」として引用されつづけた。(2)近年の排外主義の浮上のなかで、金は、「テロリストを英雄に仕立てる韓国」という形で、安重根と共に「嫌韓」の素材となっている。

これらの考察を踏まえ、結章では、今日における事件の意味を探った。(1)まず、不断な専有(問2)の表面的な多様性の裏側に、文化的外傷(トラウマ)が現れてくる時間性としての歴史の奥行きがあることを指摘した。金への同一視/他者化、その都度喚起された被害者意識/加害者意識には、日本帝国以来の植民地化、戦争、冷戦にまつわる暴力をめぐる日韓両社会の心理的苦境が映し出されている。ただ、事件を想起し、その意味を再構成する活動からは、被害者意識/加害者意識をめぐって相手国と刺激・共謀・共鳴しあうという反響の連鎖が見られた。(2)反響から捉えなおした事件の意味(問1)については、「劇場型犯罪」としての系列化によって無意識の領域に封じ込められていく加害者意識と対面する自己省察の努力を評価する立場から、日韓の間における「反響共鳴」のあり方、とりわけ、加害者としての自省を通じて共鳴しあう連携の課題を提示し、両社会を仲介しつつ再帰的感觉を高める在日朝鮮人及びマスメディアの重要性を論じた。

金嬉老事件は、歴史の外傷を乗り越えていく日韓両国にとって、自らのナショナル・アイデンティティの変容とこの地域の未来的姿を探る必要性に目を向けさせつづける強力な喚起力を持つ出来事である。このような意味から最後に、金嬉老事件を現在における「新たな民族問題」として示しなおし、今後の課題をまとめた。